

海とわたくし

東京水産大学名誉教授
宇田 道隆

私は明治三十八年土佐の国に生れた。海に関心を持ったのは小学生時代から浦戸湾、桂浜、種崎で魚をとったり、泳いだりしてからだだが、海援隊長坂本龍馬や日本海海戦の東郷さんの参謀長島村速雄(後元帥)の生家が近くだったのと父の海好き(号漁溟)の影響で海軍提督になる夢を見るようになった。

だが、中学を出る頃になると先輩として学士院賞を受け帰省講演された寺田寅彦先生にひきつけられ、続いてアインシュタインの相対性原理に魅せられて理科志望に鞍がえし、結局東大物理へ。そこで寺田先生から黒潮の色の解明など海の学問的な興味をかき立てていただいた。

昭和二年に大学を出て水産講習所へ就職できたのが海の研究につながる縁となった。物理の基本は一応学んでいたが海洋学や水産の知識は皆目なかった。潮目の実験をやりながらイロハから海の関係の書物、

雑誌を渉猟して勉強した。低気圧とブリ漁獲の統計的相関研究などやり始め、魚、水産のことも詰めこみ始めた。有難いことに寺田先生、藤原咲平先生、田内森三郎先生など大先輩が居られ、親切な指導をしていただけだ。海洋学など参考書も学者もまだ当時は数少なく、自由奔放に研究に着手できた。

私は気象学の知識を類推的に応用して海洋学の組織的研究をもくろみ、産業気象の要領で水産海洋学、漁場学を体系づけようと大それた考えを持ちはじめた。せっかくなんだ量子論などの理論物理から重要魚の適水温スペクトル図表などの作成にかかった。当時は海洋観測が明治年間く大正初期に始まって二、三十年のデータがたまっていたのを整理してまとめた人もなかったもので、平年海況図表を作り、海況予報を天気予報と組み合わせてやり、漁況予報に進もうと大望を起した。

幸いなことに、昭和四年農林省水産試験場ができて、海洋調査専門の技師に廻された。こうして、その年の春いきなり蒼鷹丸という調査船に乗って伊豆七島方面の黒潮の調査である。観測機器の取扱いや何や全部白紙の心で教わった。船酔いに耐え、一生懸命浪のシブキをかぶりながら頑張った。

幸い私は中学・高校・大学と陸上競技の選手生活に加えて、軍隊で一年砲兵として鍛えられて来たのが、こうした実地の仕事の下地として役立った。ちょうど好適の職場を与えられた天恵を感じする。暮には相模湾でブリの海洋調査のため、三角波の中を測流に苦労した。

いなんばといふ孤つ岩あり夕づきて
潮目しるけく黒潮に立つ

夜も昼もたぎち流るる黒潮の

潮目につどふいのちをぞ思ふ

陽に透し見る管瓶のプランクトン

紅瑠璃彩に動けり飽くなく

浮雲の影移るかにいわし群

燦めく海面を黒き一団

黒潮の層重状態を水塊解析し発表(和英文)した。昭和四年夏、八丈島、小笠原島



に旅し、定期観測を芝罘丸依託指導した。昭和五年六月若狭湾を四隻で一斉調査、天氣に恵まれ大成功だったので、これが評判となり、昭和七年五、六月、同八年十、十一月、同十六年五月と日本海、東シナ海、黄海を四十隻で一斉調査。計画立案者の私は蒼鷹丸で終始リーダーとして陣頭に立ち、和英両文で厚い報文を提出、戦後流行のマルチプル・サーベイの魁となった。太平洋側でもやれというので昭和八年八月、同九年八月北太平洋沿岸一千哩海洋調査を実施。これもまた企画、実施、成果とりまとめの責任者に若輩の私が起用された。ナンゼン連結採水器、リヒター転倒温度計、硝酸銀塩分滴定、自記水温計、音響

測深等で世界一流の観測水準に引上げ、生の資料を『海洋調査要報』に、速報海況・漁況を月報『海洋図』に出すので寸暇もないう大車輪の忙しさであった。

昭和九年は前年と逆の大冷害で親潮寒流強盛の平年より数度低温を沖から打電、結局昭和十年から毎年一、二、三月、八、十月東北海区、北洋まで観測調査し、四月に夏の長期予報を出す冷害対策海洋調査が始まり開戦まで続いた。昭和十、十一年頃から紀州沖の黒潮が異状だと漁民に訴えられ、昭和十二年私は漁村をめぐる実状を調べ、昭和十三、十四年と黒潮を一斉調査して、黒潮大蛇行が異常大冷水塊（親潮潜流系中間層水湧昇起源）をめぐる起っていることを世界で最初に発表（一九三七、四〇和文、四九英文）。昭和十四年夏は東シナ海、南シナ海を往復調査した。

学位論文は昭和十年三月寺田寅彦先生に「一年位で書いてみたまえ」と言われ、取りかかったところ先生が病気で大晦日に亡くなって頓坐、昭和十二年に岡田武松先生から「早く出せ、見てやるから」と声がかかり、「海洋潮目の研究」を英文タイプし

東大に提出、十四年四月理博の学位記を受けた。主査は恩師の藤原咲平先生だった。

昭和十三年から漁海況通報事業がラジオ、無電等で開始され、私は遠洋魚類を担当、委嘱漁船など漁村めぐりに忙しかった。昭和十四年冬と春に北洋の海水調査に日高孝次さんなどと砕氷艦で出張した。

昭和十六、七年は関特演で応召、河童が大陸へ上げられた。昭和十七年神戸海洋気象台長に転じ、十八年秋再び赤紙で南方へ。結局終戦は広島で原爆を喰って復員、広島勤務から長崎海洋気象台創設、昭和二十四年東海区水産研究所初代所長で帰京、二十六年東京水産大学教授、四十三年東海大学教授と転々、外国へも盛んに出かけ、昭和四十五年東京での国際海洋学大会組織委員長もつとめた。昭和四十二年には「亜熱帯反流」発表（蓮沼氏共著）、同五十二年御歌会召人（「海」として、金華山沖にしるけき潮すぢを
いるか群れ飛ぶ夕焼の海

以上、海との出会いを書いた。今は大病手術後療養しながら執筆に懸命の日々だ。